

ブリーフィング・メモ

公務員とスポーツ

政策研究部防衛政策研究室長 片山 善雄

はじめに

リオデジャネイロ・オリンピックでは荒井広宙が陸上男子 50 キロ競歩で銅メダル、江原騎士が水泳男子 800 メートルリレーでこれも銅メダルを獲得した。両名は自衛隊体育学校に所属している。また糸数陽一（警視庁第 8 機動隊）がウエイトリフティング男子 62 キロ級で 4 位入賞、朝長なつ美（警視庁第 4 機動隊）が女子近代五種競技で、これまでのオリンピックで男女を合わせて最高の 13 位に入った。女子レスリングで 4 大会連続金メダルの伊調馨（ALSOK）は、警視庁のレスリング部（第 6 機動隊）を練習拠点としている。

リオ以前のオリンピックや、各種世界大会、国内の全国大会で、警察官や自衛官を中心に公務員選手が活躍してきた。東京（1964 年）、メキシコシティ（1968 年）オリンピックのウエイトリフティングで二連覇を果たした三宅義信（自衛隊体育学校 - 当時）は、ある年代以上の者にとっては、国民的ヒーローである。

また、国民体育大会（国体）に教員枠があった時代には、公立学校の教員も、国内トップレベルには及ばないものの、それなりの成績を収めていた。なお「市民ランナー」として有名なマラソンの川内優輝は、埼玉県庁に所属しているが、自主的にトレーニング、レース参加をしている。

このように公務員選手はスポーツ界で一定の地位を占めているが、スポーツ自体が著しく変化している。多くの競技においてプロ化・興行化が進み、トップレベルにおいては「二足の草鞋を履く」こと、すなわちスポーツと本業とを両立させることが難しくなっている。と言うより、スポーツそのものが本業とならざるを得なくなっている。このような状況での公務員とスポーツの問題を考えてみたい。

公務員選手の実態

公務員の選手には、任務としてスポーツを行っている選手と、課外活動としてスポーツを行っている選手がいる。自衛隊体育学校の学生は、オリンピック種目（柔道、射撃、近代 5 種、レスリング、陸上、アーチェリー、水泳、ボクシング、ウエイトリフティング）の練習が任務である。バイアスロン、クロスカントリー選手を養成していた冬季戦技教育隊特別体育課程教育室は、体育学校隷下に編成替えされた。中国、韓国も国防組織のもとにスポーツ

選手の養成機関を持っているほか、多くの新興国にもそのような例がある。

警察の術科特別訓練員（柔道、剣道、逮捕術、拳銃射撃）いわゆる特練員は、一般の警察官に比べて優遇された練習環境にあるが、日常、警察官としての任務も全うしている。東日本大震災の時は、稽古どころではなかった。その他の公務員選手は、警察官・自衛官も教員も、課外活動としてスポーツを行っている。

公務員スポーツのレベル

率直に言って、公務員スポーツのレベルは、（後で述べる剣道を除き）低下傾向にある。これはスポーツが普及して競技全体のレベルが上がり、一流選手には幼少期からのエリート教育が必要なことに加え、プロ化によってアマチュア選手がトップレベルで活動することが難しくなったからである。プロ選手であれば練習時間は豊富であり、長期の合宿にも参加できるし、高額の報酬も期待できる。公務員の場合、スポーツ選手だからと言って、給料が上がることはない。遠征や合宿に参加するにも、休暇を取らなければならないケースが多い。才能のある選手をリクルートする際に、公務員の場合は現役を引退しても生活は安定しており、定年まで勤めあげれば生涯の収入は民間に比べて悪くはないと説得はする。だが、同学年・同期の選手よりも収入が低いと、自分が正当に評価されていないと若い選手は感じるようである。

話を簡単にするために男子柔道に限って言えば、1984年ロサンゼルスオリンピックまでは警察官の選手が出場しメダルも獲得していたが、それ以降の出場はない。最近では、全日本選手権の優勝候補にも、警察官の名前が上らない状況が続いている。これに対して、オリンピック種目でもなく、興行的価値のあまりない男子剣道では、全日本選手権の出場者は警察官が大半であり、優勝者数も警察官が圧倒している。平成に入ってからだけでも、25年以外は、優勝者は警察官である。この警察剣道の隆盛ぶりと対照的な（あえて失礼な言い方をすれば）警察柔道の凋落ぶりは、プロ化した競技で公務員選手がトップレベルを維持することの困難さを象徴している。

外国籍の選手に門戸を開いている競技でも、公務員チームは苦しい。大阪府警察ラグビー部は、1980年代までは、神戸製鋼、トヨタ自動車、近畿日本鉄道と肩を並べる強豪であった。だが、ラグビーがプロ化し、ワールドカップに出場したり、強豪国の代表選手になったりした外国人選手を補強する企業チームに押されて二部落ちし、トップリーグのチームとの差は大きい。他の警察や自衛隊のラグビーチームも振るわない。「旺盛な体力気力」にも限度がある。

将来の方向

将来的に公務員スポーツはどのような方向に向かうのであろうか。まず、自衛隊体育学校

所属選手は、プロの選手と同じように練習に専念できる。遠征のために休暇を取る必要はなく、旅費も公費から支出できる。この恵まれた環境を活かして、優秀な選手、指導者を集めて、国内はもとより、世界のトップレベルの大会、あるいはオリンピックでの活躍が期待される。

自衛隊体育学校所属選手以外の公務員選手が頂点を極めるのは、剣道を除いて、非常に厳しい。それでも、空手道（警視庁第5機動隊）は全日本実業団体大会で何度も優勝しているし、アメリカンフットボール（警視庁第9機動隊）はXリーグ（社会人リーグの最高峰）で活躍している。大阪府警察ラグビー部はトップリーグへの挑戦を続けている。射撃、近代5種、レスリング、ウエイトリフティングなどは競技人口が少ないこともあって、公務員選手に活躍の機会が大きい種目である。

スポーツは元来、余暇の楽しみであったものが、競技化、組織化されたのである。金銭的収入を求めるではなく、スポーツをつうじて得られる経験が、個人にとっても社会にとっても有意義なものになることが、アマチュアスポーツの真髄である。したがって、スポーツをすることによって任務に良い影響が出れば、公務員スポーツの最も好ましい成果であるし、組織全体の士気が高揚することも期待できる。もちろん、上を目指すことは大切である。より強くなるように努力、工夫することで、個人もチームも、競技だけでなく競技以外の面でも向上する。

所属組織の名誉を重んじるあまり、勝負にこだわりすぎる傾向もないではない。警察、自衛隊という上下関係の厳格な組織と、スポーツ界という先輩後輩関係の厳格な世界のマイナスの相乗効果を防止することは、スポーツ関係者だけではなく、組織全体の責任である。

国際的なつながりでは、自衛隊も参加した国際防衛ラグビー競技会（International Defence Rugby Competition、オーストラリア、サモアからは警察チームも参加している）や、これまで日本は参加していないが世界軍人体育大会（World Military games）がある。好成績が期待できるレベルであるし、同じ職業の者同士の親睦も期待できる。費用や時間の捻出、勤務との調整は容易ではないが、積極的に参加を検討すべきイベントであろう。

現役引退後のケアも忘れてならない。柔道で世界選手権（1956年）、日本選手権（1957年）を制した夏井昇吉（秋田県警察 — 故人）のように、現役引退後も本業に励み、県警の要職を歴任し、文武両道の信念を自ら貫いた者もいる。プロ化が進んだという点で時代背景が異なるが、このような例は多くはない。定年を待たずに辞めていく者もいる。引退後もスポーツで得た経験を糧として任務に打ち込めるよう、現役時代からの周囲の指導や本人の精進が必要である。

最も悲劇的な例は、1964年東京オリンピックマラソン銅メダリストの円谷幸吉（自衛隊体育学校 — 当時）である。円谷は次のメキシコ大会での活躍が期待されたが、故障に悩まされ、周囲の期待が重圧となって自ら命を絶った。当時のオリンピックは、国の威信をかけるという風潮があった。円谷が競技に取り組む真摯な姿勢は国民的な尊敬を受けていただけに、日本社会に大きな衝撃を与えた。

最後に少子高齢化と人口減少にも、触れておきたい。2013年に総人口は12,730万人、生産年齢人口（15～64歳）は62.1%であったが、2030年にはそれぞれ11,662万人、58.1%と推計されている（国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」平成24年）。あらゆる組織が、人員の削減と優秀な若者の取り合いに直面するであろう。スポーツを適度に奨励することによって魅力的な職場づくりに取り組むとともに、スポーツのために本来の任務をおろそかにすることはなく、逆に任務にプラスにする努力が求められる。

（文中敬称略）

参考資料

各種競技団体、警視庁・大阪府警察各機動隊、自衛隊体育学校ホームページ

（2016年11月18日脱稿）

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断転載・引用はお断り致します。
ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。
防衛研究所企画部企画調整課

外 線：03-3260-3011

専用線：8-6-29171

FAX：03-3260-3034

防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>